連載 第56回

福聚山史

池浦泰憲 文
及川一晋 編

《特別編》

「常円寺本堂の歴史」

本年、常円寺の本堂が建立されてから五十年を迎えます。

昭和四十一年（一九六六）十月三十一日、本堂の落慶式が行われました。以前この「福聚山史」においても、当時の様子を報じた『日蓮宗新聞』の記事を紹介し、再建に至る過程を取り上げましたが、今回、五十周年に当たり、今一度、改めて常円寺の本堂の歴史を振り返ってみたいと思います。

●旧本堂

本堂とは、お寺の中でご本尊を安置する建物を指します。「金堂」「仏堂」などの呼称もありますが、そのお寺の中心であるといえます。

それでは、以前の常円寺の本堂はどうだったのでしょうか。度々、ここで取り上げている明治十年（一八七七）の「寺院明細簿」境内図に、間口八間、奥行七間半の「本堂」がみえます。さらに江戸時代に遡ってみますと、文化七年（一八一〇）の「御府内寺社備考」には「本尊宗法之通、諸尊安置」された「間口八間、奥行き八間」の「客殿」があったことがわかります。当時、本堂を「客殿」と呼ぶお寺もあり、その大きさが明治時代の記録とほぼ一致していることから、この客殿は明治十年の「明細簿」にみえる「本堂」のことでしょう。

その後、本堂は昭和初期に改築されます。かつて境内にあった灯籠（平成二十三年三月十一日の大地震により倒壊）と、現在も境内にある平石にそれを示す次の銘が刻まれています。

祝　常円寺本堂改築並及川真能師　喜寿納之
昭和五年十月十日
東京芝二本榎
鈴木源次郎

そして、改築された当時の昭和六年（一九三一）の姿が残っています（写真①）。ここに写る常円寺の本堂は、銘にみえるように東京芝二本榎の鈴木源次郎氏によって手掛けられました。源次郎氏は当代の名匠であり、その手による本堂は、「東都一」と喧伝されたともいわれています。

写真①　昭和６年当時の本堂

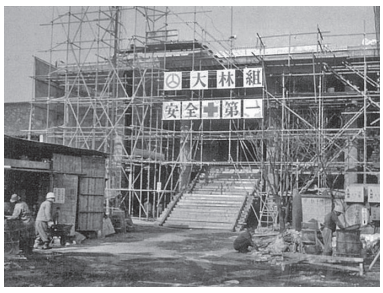
写真②　昭和 20 年代、門の奥に見える「仮本堂」

●仮本堂時代

ところが、この本堂もわずか十五年後、昭和二十年（一九四五）五月の空襲により庫裡とともに焼失してしまいます。終戦翌年の昭和二十一年（一九四六）の総代会では本堂再建が復興の第一と掲げられますが、諸事情により庫裡再建が先となり、とりあえずは「仮本堂」（写真②）が建てられ、その状態で数年を経ることとなりました。

●いよいよ再建へ

終戦から十二年後の昭和三十二年（一九五七）、ようやく本堂再建の機運が起こります。しかし、本堂再建は容易なことではなく、当時の総代会の記録には「長期の計画」をもって臨むこと、そして新しい本堂は「鉄筋建ての不燃焼のもの」がよいとの方針が記されています。その後、昭和三十八年（一九六三）に、ようやく檀家の勝田千利教授による設計図が完成し、翌年から寄付勧募が開始されました。当時、常円寺には「壱千余の檀家」があり、勧募は一軒あたり平均五万円計算であったといいます。ちなみに昭和四十年（一九六五）頃の大卒初任給は二万円ほどでしたが、落慶一ヶ月前の時点で約九百七十九人からの寄付があり、昭和四十一年十月三十一日、落慶式を迎えました。



写真③　昭和 41 年、工事中の様子

●常円寺の、さらに地域の「芯」として

ところで、この本堂再建にあたり、協力をいただいた檀家のご先祖さまは、本堂の須弥壇裏の「霊牌殿」に、それぞれ各家のお位牌を造り、現在もお祀りしています。この本堂には、須弥壇に鎮座するご本尊を中心に、一致して再建へと導いた檀信徒家のご先祖さまも祀られているのです。

また、本堂落慶式の折、当時の住職及川真学上人は「建築にあたり考えたことは、檀家の方々が活用しやすいようにすることと、地域全体の教育文化のためにお役に立ちたいということでした」と語っていました（『日蓮宗新聞』）。実際「予想通り落慶後は地域の人々が連日活用するようになった」（同）といい、現在は「地域全体の教育文化の役に」という機能は、主に平成四年（一九九二）にたてられた祖師堂に受け継がれていますが、堂内に飾られたレリーフ、一代記の絵画など（※）から「モダン」（『日蓮宗新聞』）と称された本堂は、常円寺内の「芯」としてだけでなく、境外に広がる地域の「芯」の役割も担っているのです。

（終）

※この本堂のレリーフと一代記を製作された、檀家の高木倶之様が本年八月十一日亡くなられました。謹んでご生前のご尽力に感謝するとともにご冥福をお祈りいたします。